

令和3年度
教育研究所事業報告



四万十町教育研究所

令和3年度

四万十町教育研究所 事業報告

目 次

1. 教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）

ICT の効果的活用による情報活用能力の育成と、個別に最適化された質の高い学びの研究

.....p 1

2. 学校への研究支援

（1）Q-U・hyper-QU の取り組み

.....p 3

（2）「いのちの学習」への支援

.....p 4

（3）校内研修支援

.....p 5

3. 教育支援センターの運営

.....p 6

4. 教育相談活動（ 教育相談員・SSW ）

.....p 8

5. 研究協力校の取り組み

.....p 10

6. 副読本「わたしたちのまち 四万十町」の検証

.....p 14

7. 四万十教科書センターの運営

.....p 15

8. その他の取り組み

（1）研修

.....p 16

（2）所内会・全体会

.....p 17

（3）教育研究所便り「しまんと」

.....p 18

（4）えんぴつの持ち方教室

.....p 19

1. 教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）

ICT の効果的活用による情報活用能力の育成と、個別に最適化された質の高い学びの研究
研究員 浜口 千茶

【テーマ設定の理由】

急速に情報化が進展する Society5.0 の時代においては、情報や情報手段を主体的に選択し活用していくための情報活用能力が必要とされ、発達段階・各教科等の学習活動を通じて体系的に育成することが求められている。また、学習指導要領に基づき「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱からなる「資質・能力」をバランスよく育成する一つの手法として、ICT を効果的に活用する重要性がますます高まっている。

本町では、GIGA スクール構想に基づき、情報活用能力の育成と個別に最適化された質の高い学びを提供できる環境を整備し、プログラミング教育を含めた情報教育を推進していくこと、対面指導のオフライン教育とICTによるオンライン教育を組み合わせた新たな教育の実践を目指している。

このことを踏まえ、町内の学校が抱えている情報教育推進における課題等を改善すべく、スピーディーに取り組むことが必要であると考え、上記のテーマを設定した。

【調査研究の概要】

- 情報活用能力の育成に係る系統表の作成に向けての情報収集・情報提供。
- 「主体的・対話的で深い学び」に向かうための授業改善において、ICT の効果的な活用の指導方法の検証と授業実践。
- 情報モラル教育の取組等の発信。

【成果と課題】

成果

◇9月からのタブレット活用実施に向けて、まずは町内16校でスムーズに活用できるように学、校教育課と連携し、「四万十町として目指すICT活用の姿」「端末の活用目標」「端末の日常的な活用方法」「端末の取り扱い方のルール10の約束」「健康面での注意」等を記した【GIGA スクール構想1人1台端末に向けて 四万十町版ハンドブック】を作成し、町内の全小中学校に配布した。

◇活用が進み始めた10月以降は、町内の学校でのプログラミング学習に参加し、活用方法を学んだり、児童の学習の様子を見たりすることができた。また「授業づくり講座」や情報教育推進リーダーによる公開授業に参加することで、教科におけるタブレットの効果的な活用方法やプログラミング学習についての情報収集をし、研究所だよりで町内の小中学校教職員に発信した。

◇他市町村との研究員と交流をすることで、タブレット活用方法や学校での授業実践の情報共有を行い自分の実践に活かすことができた。

◇11月からは、町内の小学校でプログラミングの授業実践を行った。

◇今年度の1人1台端末活用状況調査を行い実態把握をするとともに、各学校で目安にしてもらえるように児童生徒の四万十町版情報活用能力系統表チェックリストを作成した。

課題

- ◆町内の小中学校に向けてスムーズにタブレット活用が進むように準備はしてきたものの、学校に出向いて授業実践や校内研修支援を十分に行うことが出来なかったことが課題である。
- ◆授業実践では、プログラミング学習が主になり、教科の中での活用方法を示すような提案授業ができなかった。今年度は、タブレットに慣れることに重点を置いたこともあり、ICTの効果的な活用を検証するところまで至らなかった。

<ICTに係る研修>

6/8	授業づくり講座 jamboard 活用法	吾桑小
6/24	情報教育推進リーダー公開授業 算数科 「プログラミングアプリ」(Studuino)を活用して点対称な図形を書いてみよう	栲原小
7/16	オンライン研修 (ICT 支援員のためのオンライン研修)	
7/14	校内研修「思考力を使った思考力の養成について」	北ノ川中
7/21	オンライン研修 (学びの保障オンライン学習システム MEXCBT の活用に関する説明会)	
	タブレット操作研修①	四万十町
8/4	タブレット操作研修②	四万十町
7/30	情報教育担当者会	教育センター
9/24	プログラミング校内研修	昭和小
10/18	プログラミング研修・校内研修	東又小
11/8	プログラミング研修	影野小
11/15	プログラミング研修・校内研修 佐川町研究所 情報交換	東又小
11/17	プログラミング研修・校内研修	米奥小
11/22	情報教育推進リーダー公開授業 図画工作科 「プログラミングアプリ (Viscuit) を活用してオリジナルイルミネーションを作ろう」	栲原小
12/13	タブレット活用授業参観 「ドキュメント」を活用して協働作業	興津小
12/14	プログラミング研修・校内研修	米奥小
12/15	情報教育推進リーダー公開授業 体育「ダンスで広げるきずなプロジェクト～のいっこダンスをつくろう～」	野市小
12/20	プログラミング公開授業 図画工作科 「クリスマスのイルミネーションをつくろう」	神ノ谷小

2. 学校への研究支援

(1) Q-U・hyper-QUの取り組み

【実施計画】

期 日	内 容	備 考
4月	校長・教頭合同会で実施のお願い	
4月	各学校の注文書の回収	全小中学校
5月・6月	全小中学校で1回目実施	全小中学校
10月～12月	全小中学校で2回目実施	全小中学校
1月～2月	希望の学校で3回目実施	希望校のみ
10月～2月	実績報告・まとめ	

【目的・概要】

Q-Uは、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」と「いごちのよいクラスにするためのアンケート」からなり、児童生徒の心を理解するための調査方法の一つである。また、今年度からは、「日常の行動をふり返るアンケート」の hyper-QUを中学校に導入した。教師が児童生徒の個々の状態と学級の状態を理解するための客観的で多面的な資料となりうるものであり、また、学級集団づくりや児童生徒理解、教育実践の効果測定、不登校予防、いじめの発見・予防、学級崩壊の予防において活用され効果が期待できるものである。

本町が、Q-Uに取り組み始めて15年目を迎え、今年度も全小学校・中学校で実施することができた。対象は、小学校3年生以上としているが、希望があれば小学校1・2年生も実施することが可能である。年間2回、希望がある学校には、3回目を実施している。

【成果と課題】

Q-U・hyper-QUの活用については、実施データを細かく分析し、全職員の資料として校内研修などでの活用や児童生徒の個人面談の資料とするなど、各学校での取り組みが継続されており、児童生徒理解につながっている。

教育研究所でも、実施データは簡易プロット表を作成して蓄積し、全町の児童生徒の傾向を把握している。また、各校から出されたデータをもとに傾向を分析し、所内会で報告し、学校支援の一助となるように、職員間で情報の共有を行った。また、昨年度に引き続き、小学4年生以上のSNS関係の集計結果については、少年補導センターとの全体会において情報共有を図った。

今後は、Q-U・hyper-QUのより効果的な活用や、学級経営のマネジメントにどう反映させていくのかが課題である。研究所からも積極的に情報発信をしていきたい。

【今後の取り組み案】

来年度から、Q-Uの活用の実施時期やコンピュータ診断依頼時期、実施回数を町内小学校で揃えて取り組むようにし、コンピュータ診断結果が同じ時期に揃うようにした。そのことにより、バラバラに集まっていたデータが同時期に揃うことで町内の傾向が見取りやすいようになる。

(2)「いのちの学習」の取り組み

【実施内容】

○「いのちの学習」実施校

- ◆川口保育所 ◆認定子ども園たのの ◆くぼかわ保育所 ◆昭和小学校 ◆東又小学校
- ◆影野小学校 ◆大正中学校 ◆小鳩保育所 ◆田野々小学校（コロナにより中止）

【目的・概要】

研究所では、「いのちの学習」に取り組む学校や保育所に、教材の貸し出しや授業への協力などの支援を行っている。

「いのちの学習」の目標は、

- ① いのちの大切さについて学ぶ。
- ② 友達の気持ちを考えることのできる共感性を育てる。
- ③ このプログラムを通して家族の絆を大切にすることを養う。

である。幼児期・児童期の早い時期にいのちの教育をすることで、いのちに関心を持ち、いのちを大切にしていこうと心をはたかせる取り組みである。

学習では、母親のお腹の中にいる赤ちゃんの心音を聞いたり、エコーの画像を見たり、赤ちゃんに触れ合うなど、成長を観察したりする体験的な活動と合わせて、家族から話を聞くことや絵本の読み聞かせや紙芝居、胎児人形、赤ちゃん人形等を使った学習も行っている。ただし、今年度も、新型コロナウイルス感染症対策のため、妊婦さん・赤ちゃん・幼児と「触れ合う」場面の体験や内容を変更・縮小したりして行うこともあった。

【成果と課題】

年間を通して定期的に「いのちの学習」に取り組んでいる保育所・認定こども園や、研究所便りの情報から、今年度初めて教材の利用を希望した学校があった。学校においては、養護教諭が所有している教材を使用していることも多いため、研究所への貸し出し希望は多くはないが、妊婦体験シュミレーター等、ここでしか借りられないものの利用は増えてきている。

また、保育所等と中学校が連携して取り組んでいる場合もあり、子どもたちの発達段階に合わせた「いのちの学習」が継続して行うことができている。

研究所としては、貸し出し教材等の問い合わせに対しての資料提供、授業参観や学習中の幼児・生徒へのサポートとして関わらせていただき、研究所便りで町内の小中学校に紹介することができた。

課題としては、各校へと取り組みがさらに広がるように、情報発信と併せて学習内容の充実も図っていく必要がある。

【今後の取組案】

各校の取り組みについて情報収集等を行い、保幼・小・中の連携した取り組みについての情報発信や実施につながるようなサポートを行っていきたい。

(3) 校内研修支援

【実施時期】

田野々小学校	校内研修（公開授業）	6/15
昭和小学校	校内研修（講話・研究協議）	6/30 9/24 9/28 11/1 11/24
大正中学校	校内研修（講話・研究協議）	6/8 7/15 8/27 11/16
影野小学校	校内研修（公開授業・研究協議）	9/24
東又小学校	校内研修（公開授業・研究協議・講話）	10/5 10/18 11/15
米奥小学校	校内研修（公開授業・研究協議）	10/28 11/17 12/14
窪川小学校	校内研修（公開授業・研究協議・講話）	6/1 11/9
興津小学校	校内研修（公開授業）	12/13
北ノ川中学校	校内研修（公開授業・研究協議・講話）	7/14
窪川中学校	校内研修（公開授業・研究協議・講話）	4/27 12/7

○四万十町小・小中連携教育推進協議会 5/13 7/27 11/12 1/14
 ○四万十町道徳教育推進協議会 6/29 2/17（コロナ感染症により中止）

【目的・概要】

本町の教育委員会では、校内研修を活性化するために校内研究支援事業を行い、学校独自で使える研修費の補助を行っている。そこで、研究所でも、各学校の校内研修に参加し、研修が活性化するように協力・支援を行った。

基本的には、校内研修を公開している学校を中心に、ともに研究する仲間の一人として校内研修等に参加させていただいた。

【成果と課題】

今年度は、10校の小中学校の校内研修に参加させていただいた。各校の公開授業を参観することで、小学校や中学校の学習内容の系統性や日々の取り組みの成果を、適宜情報発信することができた。また、授業後の研究協議等にも参加することができ、学校の取り組みや方向性が明確になるとともに、よりよい学校支援のあり方を考える契機となった。

課題としては、町内の全小中学校での公開授業、または、校内研修や学校行事等へ一度は参加し、各校の取り組みについて把握できるよう、依頼や日程調整を行っていく必要があった。ただし、コロナ感染状況を鑑みて、延期・中止になったり参加を控えたりすることが多かったため、状況に応じた対応が必要だと思われる。

【今後の取り組み案】

来年度も引き続き、校内研修や学校行事などには、できるだけ参加するようにしたい。また、各校の取り組み等について、情報を発信することによって、それぞれの課題に沿った支援となるように取り組んでいきたい。

3. 教育支援センターの運営

【目的・概要】

- ◆諸事情（心理的・情緒的・身体的等の理由）により不登校状態に陥った児童・生徒に対して、相談及び個別指導、集団生活の指導・支援を行い、学校生活への復帰及び自立を図ることを目的とする。
- ◆義務教育終了後、進路が決定していない者等に対して、相談及び情報の提供、学習支援などを行い、社会への参加及び自立を図ることを目的とする。
- ◆教育支援センターでは以下の指導目標に基づいて、子どもの成長や課題に合わせて個別に支援を行い学校復帰を目指す。

（指導目標）

○心の安定を図る

- ・教育支援センターが通室生にとって安心できる居場所となるように支援する。

○規則正しい生活リズムを身につける

- ・教育支援センターに通室してくることで生活リズムが作られるように支援する。

○他人の気持ちを考え、認め合うことができる

- ・人と関わったり、つながったりする楽しさを感じられるように支援する。

○様々な活動を通して自信を持つことができる

- ・子どもたちそれぞれが自分の得意な分野での活動を通して自信を持つことができるように支援する。

【通室生の推移】A～H（入室願受領順）

	A	B	C	D	E	F	G	H
4月					通室			
5月					通室			
6月	通室	通室	通室		通室			
7月	通室	通室	通室	通室	通室			
8月								
9月	通室	通室	転校	通室	通室	通室		
10月	通室	通室		通室	通室	通室		
11月	通室	通室		通室	通室	通室		
12月	通室	通室		通室	通室	通室		
1月	通室	通室		通室	通室	通室		
2月	通室	通室		通室	通室	通室		

【次年度への課題】

「教育支援センター」では、学校・保護者等と随時に相談しながら児童生徒の状況に応じた学校復帰等に向けて、学校・保護者・SSW等と定期的な話し合いを持ち、全員が情報共有と支援方針の確認のもと支援にあたる必要がある。さらに、状況に応じ在籍校の教員に教育支援センターへの訪問を依頼し、面談や学習指導などの機会を設けてもらうことで、通室生の状況の共通理解と精神的安定を図ることが期待できる。

通室している児童生徒は、生活リズムや学習の理解度、情緒的な不安定さなどの状況が異なっているこ

とから個別対応の必要があり、指導員の勤務状況によっては人数的に十分な対応が難しい場面が多くある。また、常勤の指導員がいないため、引継ぎ事項が難しい面もある。そのため、研究所の職員とも日頃より共通理解を図り、児童生徒に関わりを持ってもらい臨機応変に対応できる関係を築くなど、支援方針の検討を含め3ヶ所の教育支援センターの運営体制についての工夫や強化が必要である。また、夏休み明けや冬休み明けなどの通室が生活リズムの乱れからか、どの児童生徒もスムーズにスタートができない。長期休業中に新学期に向けた支援の充実が今後の課題となる。

4. 教育相談活動（教育相談員・SSW）

【目的・概要】

児童生徒、保護者、学校、地域などからの相談を受け、学校だけでは対応が困難なケースに対して、環境への働きかけや調整を行い、福祉・医療などと結びつけることによって解決を図る。増加傾向にある不登校の子どもへの支援にあたっては、家庭訪問を実施すると同時に、関係機関と連携して対応にあたる。また、義務教育終了後、引きこもり傾向にある19歳未満の子どもについては、若者サポートステーション等との連携を図り、社会参加及び自立を目指した支援を行う。さらに就学前の厳しい環境にある子どもや発達が気になる子どもについても、小学校へ円滑に入学できるよう、保育所や認定こども園（以下「保育所等」という。）、関係機関等と連携して、その子どもと保護者への支援を行う。

【活動内容】

- ・問題を抱える児童、生徒が置かれた環境への働きかけ
- ・関係各機関とのネットワークの構築、連携、調整
- ・保護者、教職員等に対する支援や相談、情報提供
- ・放課後子ども教室の支援及び助言

【成果と課題】

(成果)

- ・課題を抱えた児童、生徒について、学校や支援機関への情報提供を行い、調整を図ったうえで連携して支援することができた。
- ・発達特性のある子どもやその家族への支援については、本人や家族の困り感に対して環境調整をし、各関係機関と相談しながら支援を行うよう心掛けた。
- ・ひきこもりや義務教育終了者については、関係機関と連携を図り、20歳以降も切れ目のない支援を継続するため、関係機関への引継ぎを行った。
- ・就学前の子どもについては、定期的な保育所への訪問や保育士からの相談を受け、早期に子どもの課題を明らかにし、円滑に小学校へ繋げるよう関係機関と連携を図った。

(課題)

- ・不登校の児童生徒については、学校との情報共有や支援会を重ね、保護者との信頼関係を構築する中で学校や支援センターに繋げる支援を行ったが、つながりにくいケースがあった。
- ・教育相談員やSSWの役割に対して学校の理解や受け止めが弱く、課題があっても入りづらい場合がある。また、うまく連携できない学校もあった。

【今後の取り組み】

- ・支援を必要とするケースの抱える課題は、多様化、複雑化している。早急な課題解決は難しく長期にわたる支援が必要な場合が多い。関係機関との連携を密に行い、チームとして支援に取り組んでいくことが望ましい。
- ・一人一人の現状を把握し、ライフステージを通して、ニーズに応じた切れ目のない支援を継続する。
- ・子どもに関する共通の問題や悩み等を持つ保護者が、少しでもその悩みやストレスを解消できるよう「親の集い・交流会」を拡大して行う。また、信頼関係の構築に努め相談しやすい場所にしていく。
- ・義務教育終了後、ひきこもりなどで社会的孤立に苦しむ子どもに対して、社会参加や就労をサポートする「アウトリーチ支援」を関係機関等と連携しながら進めていく。

令和3年度 教育相談活動 等について

(窪川地域)

月	相 談	学校・保育所訪問	家庭訪問	巡 回	その他	備 考
4月	11	21	3	8	28	
5月	20	25	5	8	28	
6月	16	15	2	8	49	
7月	13	8	4	13	34	
8月	15	0	3	8	33	
9月	18	9	6	11	58	
10月	15	15	2	11	46	
11月	11	8	2	8	44	
12月	9	3	1	8	37	
1月	12	1	2	8	49	
2月	9	6	2	15	30	
3月	18	2	3	8	11	
計	167	113	35	114	447	

(大正・十和地域)

月	相 談	学校・保育所訪問	家庭訪問	巡 回	その他	備 考
4月	9	9	3	1	30	
5月	11	10	4	4	19	
6月	10	15	4	4	18	
7月	5	9	4	4	22	
8月	3	7	3	3	19	
9月	7	5	1	4	31	
10月	24	7	1	4	15	
11月	7	10	0	4	20	
12月	10	7	7	4	21	
1月	11	3	1	5	17	
2月	6	2	3	4	27	
3月	5	5	4	4	16	
計	108	89	35	45	255	

※ 相談は、来所・電話相談を含む。

※ 巡回は、「放課後子ども教室」への訪問

5. 研究協力校の取り組み

【目的・概要】

教育研究所では、四万十町の教育振興及び児童・生徒の基礎学力の向上定着等、健全なる成長のために研究等を行う団体に対して、「研究協力校」として業務を委託している。

今年度は、以下にあげる2校を「研究協力校」として業務を委託した。

学校・団体名	研究業務	会長
米奥小学校 「米奥小学校 学習部」研究会	複式教育における「とも学び」の充実	中越 あかね (米奥小学校)
大正中学校 「大正中教科連携部会 (雪組・月組・花組)」研究会	(1) 教科に関する研究 (学力向上及び授業改善)	須内 康雄 (大正中学校)

【実施内容】

◎米奥小学校

複式教育における「とも学び」の充実

研究テーマ	主体的に学び、確かな学力を身に付けた児童の育成 ～自ら学び、考える力をつけるための「とも学び」の研究（国語・算数）～
研究概要	1、児童が主体的に学び、考える力をつけられるような「とも学び」について研究することで、確かな学力を身に付けることができるようにする。 2、教科カリキュラムを作成し、教科等横断的な視野と見通しをもった計画を立てる。 3、「一人学び」を元に、「とも学び」をしっかりとすることができ、深い学びとなるための話し合いのさせ方について研究する。 4、学校図書館が「学習センター」「情報センター」「読書センター」としての機能を果たせるように、四万十町立図書館と連携し、先行読書や並行読書に取り組める環境を整えることで、書籍を媒体とした自然な対話が生まれ、教科書教材からの発展的な学習につながったりできるようにする。

研究の成果と 課題	○成果 ●課題 1、校内研究 自ら学び、考える力をつけるための「とも学び」の研究として、複式の研究授業を行い、授業改善する。 ① 6月 9日（水） 3・4年 学習指導案検討 ② 6月24日（木） 3・4年 国語科研究授業「3年自然のかくし絵」「4年ヤドカリとイソギンチャク」中部教育事務所指導主事来校 ③ 8月27日（金） 講師招聘しての教材研究 高知大学教育学部附属小学校より講師 ④ 10月20日（水） 1・2年 学習指導案検討 ⑤ 10月28日（木） 1・2年 国語科研究授業 ⑥ 11月24日（水） 5・6年 学習指導案検討 ⑦ 12月 1日（水） 5・6年 国語科研究授業 ○児童にとって深い学びとなるような「とも学び」ができるようにという視点での研究を進めることができた。 ●「とも学び」の中での話し合いの力の個人差が見られ、全員に同等の力がついたとはいいがたく、児童一人一人に、友達を説得できるような話し方の力をつけたり、聞き手の質問力を高めたりすることが必要である。 2、「一人学び」での質を向上させるための方法の充実 ○「とも学び」を充実させるための土台として、「一人学び」での質を高めるために、書かれている内容を理解することにも役立つ国語辞典の活用が図れた。 ○全員が同じ辞典を持つことで指導もしやすく、またその他に学校にある辞典と比較したりするなど、活用できた。 ○町立図書館との連携で、先行読書や並行読書ができ、授業をする上で教材内容に広がりをもたせることができた。 ●町内全ての学校が同じ時期に同じ教材について学習するため、どうしても重なりができ、借りることができる本に限りがあった。もっと幅広い本を借りることができたら、活用が進むと思う。
----------------------	--

【実施内容】

◎大正中学校

(1) 教科に関する研究（学力向上及び授業改善）

研究テーマ	「生徒に付けたい力を付けるICT等を活用した言語活動の充実」
研究の概要	本年度の校内研究は、主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりと学力の定着をめざす「授業づくり部会」と、生徒理解の充実と支援体制の確立、支持的基盤のある仲間づくりをめざす「仲間づくり部会」の2部会において、昨年度までの様々な取組を継続しその充実を進めると共に、県の指定を受け「授業づくり講座（国語）」に取り組み、校内外の教員との学び合いを進め、ブラッシュアップを図る。また、講座での学びを生かし、3つの教科間連携部会を組織し、授業等の取組の中で生徒が主体的に思考し対話をすることで練り合い、深い学びを実現する授業づくりを構築する中で、生徒が「主体的」に学び、高まり合う仕組みや指導を進めた。併せて、本校の課題である自学習習慣の未定着と1年生を中心とした学力低位層へのテコ入れとして、連携部会や各教科担当が核となり、本年度特に個別最適化にも取り組んだ。また「読解力養成タイム」など「大正中学校学力向上プロジェクトチーム」を継続し、チーム学校として学力定着と向上に特化した取組を進め、以下成果につながる課題改善を図った。
研究の成果と課題	上記取組を通して、下記のように、本校生徒の学力・学習状況の実態に対応した実践研究を進めることができた。 【取組1】「授業づくり講座」の実施 年度内に学校内外の教員が集まる教材研究会と授業研究会をそれぞれ2回実施し、コロナ禍ではあったが、多くの参加者を得て、研修を深めることが出来た。 1学期に実施した内容は「書く」の領域で、題材や学習素材を各県の観光ポスターから取り出し、批評文を書くというものであった。授業時にはICT活用として整備されているタブレットを用い生徒が相互に内容を検討し、校正を行い仕上げていくものであった。2学期には「話す・聞く」の領域で、四万十町をめぐる修学旅行プランをプレゼンするという設定で取り組んだ。それぞれに新聞への投書や京都の中学生への提案など、アウトプット、能力ベース、見方・考え方を意識した内容となり、研究を深め広げられた。 【取組2】「個別最適化を意識した取組」 本年度は教科別に課題を出題し授業とのリンクを意識した、また自学自習を誘う取組を展開した。本校の個別課題とは、数学科における既習

	事項の定着を目指した課題、国語科における習熟度を踏まえた学力2極化に対応したワークシートの作成や授業改善、社会科における基礎事項の徹底した定着、英語科におけるタブレットを活用した個別課題の設定と授業活用等が挙げられ、こうした粘り強い取組によって、確実に生徒の力を伸ばすことが出来た。 【取組3】「読解力養成タイム」 毎週金曜日に朝読書の時間に読解力を育成する課題に取り組み、読解力を定着・向上させることを意図して取り組んできた。本年度も正答率を把握し、どこに躓き、誤答に至ったのかを生徒と共に分析し、是正指導を継続し、全校平均正答率を70%以上にすることができた。 【検証資料】 ◆高知県学力定着状況調査における国語の正答率 1年生：65.4%（全国比+4.0p） 2年生：63.9%（全国比+1.9P） ◆学校評価アンケート「先生の授業は分かりやすいと思うか」90.6% 「学校は学力を向上させる指導や取組を行っていると思うか」95.4% ◆読解力養成タイム完全正答率 全校平均 74.4% ※学校経営計画の指標は 70%以上
--	--

【成果と課題】

今年度も昨年度に引き続き、「研究協力校」を2校にしぼった。研究協力校になった学校は、確実に実践を重ね、昨年度よりもさらに成果を上げている。研究協力校2校については、研究授業や校内研修に多く参加させていただくことが出来た。

【今後の取り組み案】

来年度も協力校の2校とさらに連携を深めるように、授業等には積極的に参加をしていきたい。また、町内の取り組みへと広がっていくように情報発信を工夫していきたい。

6. 副読本『わたしたちのまち 四万十町』の検証

【実施時期】

8月26日(木) ・・・新型コロナウイルス感染症拡大により延期
3月 7日(月)

【目的・概要】

学習指導要領改訂により昨年度から教科書が変わることを受けて、四万十町の社会科副読本『わたしたちのまち 四万十町』の全面改訂を令和元・2年度において行なった。そこで、今年度は、副読本『わたしたちのまち 四万十町』がより効果的に使用できるよう、先生方の意見を集約し検証するべく検証委員会を開催する。

【成果と課題】

四万十町の社会科副読本『わたしたちのまち 四万十町』が全面改訂されてから初めての年度となり、内容等を含めて現場の先生方の意見を集約するために、7月にアンケートを実施した。その結果を受けて、検証委員会を夏期休業中に実施するよう予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、延期となった。

検証委員会が年度末になったことで、検証後の取り組みを早めに進めることはできなかった。

【今後の取り組み案】

アンケートで集約された意見や、検証委員会での意見交換において、今後の取り組みを確認し、進めていくこととする。

7. 四万十教科書センターの運営

【運営要項】

○設置場所・・・「四万十町農村環境改善センター」の一室

○開室・休室及び閲覧時間

開室日・・・・・・月曜日～金曜日

休室日・・・・・・土・日曜日、祝祭日、12月29日～1月3日

閲覧時間・・・・・・午前9時～午後5時

○貸し出し期間・・・・10日間を限度とする（展示会開催期間中を除く）

○教科書展示会・・・・文部科学省の告示により決定

（今年度開催期間：令和3年6月11日～6月24日）

【目的・概要】

教育関係者の教科書研究の便宜や一般の方々への情報公開の一環として、平成24年1月4日より四万十町教育研究所で企画・運営・管理を行っている。

主な業務内容としては、教科書の貸し出しと教科書展示会の開催である。今年度も昨年度に引き続き、年度初めの校長・教頭合同会において、研究所の業務の一環として「四万十教科書センター」の運営のことをお知らせした。

今年度の教科書展示会は、令和3年6月11日から2週間開催した。

【成果と課題】

今年度も、年度初めから各校に教科書の貸し出しについて周知を行い、教科書センターや研究所前にポスターを掲示するなどの工夫も行った。また、昨年度に引き続き、広報や研究所便りでも展示会開催等についての情報発信を行った。展示会の開催期間中には、教育関係者以外の閲覧もあった。

しかし、教科書の閲覧や貸し出しについての周知は、まだ十分とは言えず、今後の情報発信にも工夫が必要だと思われる。

【今後の取り組み案】

少しでも利用者が増えていくように、情報の発信について、さらに工夫をしていきたい。

8. その他の取り組み

(1) 研修会

期 日	内 容	備 考
5月 7日	中西部地区連絡協議会	須崎総合福祉センター
5月20日	高岡地区市町村教育委員会連合会第1回教育委支援部会	中土佐町人権啓発センター
5月28日	高知県教育研究所春季連絡協議会	高知県教育センターライブ配信
6月 1日	心の教育センター運営協議会	心の教育センターZOOM研修
6月 9日	引きこもり支援検討会	四万十町役場東庁舎
6月21日	不登校スキルアップ研修会	高知県立高知青少年の家
7月13日	高岡地区学びなおし事業研修会	佐川総合文化センター
7月26日	高岡地区市町村教育委員会連合会第2回教育委支援部会	日高村保健センター
8月 5日	教育支援センター森田村塾訪問研修	香南市（森田村塾）
8月 5日	須崎市教職員合同研修会	須崎市民文化会館
8月 6日	ひきこもり支援に関する研修会	ちより街テラス
8月16日	SSW 研修会「いじめ問題に関わるいくつかの要因と改善ポイントについて」	高知県教育委員会 ZOOM 研修
8月19日	中土佐町教職員夏期研修会	中土佐町役場
8月20日	発達障害学習会の開催について	四万十町役場東庁舎
8月25日	山元 SC による教育支援センター研修会 「特性のある児童生徒へのよりよい対応について」	かげつ教室
8月30日	「保護者の気持ちの理解の支援—子どものすこやかな育ちを支えるために—」	高知ギルバーク発達神経精神医学センターZOOM研修
9月17日	SSW 活用事業に係る連絡協議会	大正振興局オンライン
9月30日	不登校・ひきこもりケース検討会	四万十町役場東庁舎
10月11日	教育支援センターブロック別研修会	須崎市民文化会館
11月17日	ひきこもり支援ケース検討会	四万十町役場東庁舎
11月29日	高知県教育研究所秋季連絡協議会	香美市立大宮小学校
12月 8日	児童虐待予防研修会	四万十町役場東庁舎
1月29日	第2回 SSW 研修会「不登校・ひきこもりを考える～当事者の視点から～」	高知県教育委員会 ZOOM 研修
1月30日	ヤングケアラーの理解を深めるシンポジウム	高知県教育委員会（厚生省）You Tube
2月 2日	教育支援センターブロック別研修会	心の教育センターZOOM研修
2月15日	高岡地区市町村教育委員会連合会第3回教育委支援部会	高岡地区市町村教育委員会連合会
3月11日	ESSENCE に関する You Tube 研修	高知ギルバーク発達神経精神医学センターYou Tube

(2) 所内会・全体会

【実施時期】

月・日	会の種別	場 所	月・日	会の種別	場 所
4/ 6	全体会・所内会	改善センター	11/10	全体会・所内会	改善センター
5/ 1	全体会・所内会	改善センター	12/8	全体会・所内会	改善センター
6/ 7	全体会・所内会	改善センター	1/17	全体会・所内会	改善センター
7/14	全体会・所内会	改善センター	2/9	全体会・所内会	改善センター
9/ 8	全体会・所内会	改善センター	3/7	全体会・所内会	改善センター
10/ 6	全体会・所内会	改善センター			

【目的・概要】

所内会では、研究員の研修や調査研究、教育支援センターの運営等の報告を行い、情報の共有を図るとともに各事業に対して検討を行う。所長が少年補導センター所長を兼ねており、少年補導センターを含む全体会と所内会を月 1 回開催している。

【成果と課題】

全体会は定期的に行うことができた。全体会で話し合う大まかな内容は、以下の通りである。

日程	全体会の流れ
9:30～10:30…少年補導センター所内会	1. 月行事の確認
10:30～11:00…全体会	2. 所内報告
11:00～12:00…研究所所内会	3. 今後の取り組み
※兼務である所長が全ての会に参加し、大正からの参加もあるため、できるだけ時間を有効に使えるように工夫している。	4. その他

所内会では、教育研究所内の各事業の検討や情報を共有するとともに、学校教育課支援担当職員が参加しており、相互の情報共有も図ることができた。そして、教育支援センターは場所が離れていることから、通室してくる児童生徒の様子や支援の状況を全体で把握し、共通認識を深めることができた。教育相談活動についても事例検討を行うことができ、役割は大きい。

【今後の取り組み案】

月 1 回の所内会を原則とし、教育研究所内と教育支援センターの活動についての意見交換を行い、今後も情報の共有化を図っていくこととする。その中で各事業の検討を行うとともに、教育支援センターの円滑な運営に向けての支援策を考えていくこととする。

来年度からは、8 月にも会を開催して夏休み中の情報共有をすることで、学校と連携しながら 2 学期最初の登校や支援がスムーズに行えるようにしていきたい。

(3) 教育研究所便り「しまんと」

【実施時期】

第 82 号	4月 23 日発行	第 88 号	10月 29 日発行
第 83 号	5月 26 日発行	第 89 号	11月 29 日発行
第 84 号	6月 28 日発行	第 90 号	12月 21 日発行
第 85 号	7月 19 日発行	第 91 号	1月 28 日発行
第 86 号	8月 27 日発行	第 92 号	2月 28 日発行
第 87 号	9月 29 日発行	第 93 号	3月 15 日発行

【目的・概要】

昨年度に引き続き、教育研究所が持っている情報を各学校に発信する手段として、教育研究所便り「しまんと」の発行に取り組んでいる。町内の教職員、教育研究所運営委員、教育委員に配布している。今年度も、各学校の取り組みや研修で得たことを知らせることを中心に紙面づくりを行った。

【成果と課題】

研究所の活動や町内外の学校の取り組みを紹介できたことはよかったと考える。また、今年度特に取り上げたいと考えていた、ICT の活用に関する情報については「GIGA スクール構想」というシリーズで連載し紹介することができた。プログラミング教育に関する公開授業や研修会にもできるだけ参加し、実践に活かせるように紹介することができた。

【今後の取り組み案】

来年度からは、ホームページへもアップし、研究所の活動内容等町民にも知らせていきたい。

(4) えんぴつの持ち方教室

【実施時期】

4月26日	興津小
5月 7日	七里小・影野小
5月14日	東又小・北ノ川小・川口小
5月19日	窪川小
5月24日	仁井田小・田野々小
5月27日	米奥小・十川小
6月23日	昭和小

【目的・概要】

四万十町内の2業者のご厚意により、鉛筆の正しい持ち方を早いうちから身に付けることができるように高知市の絵本の店コッコ・サンが考案した特別な鉛筆を寄贈して下さった。また、コッコ・サンによる小学校新入生（希望により上学年も可）を対象にした筆育もんちゃん「えんぴつ教室」を開催した。

【成果と課題】

今年度も、教育研究所が開催の日程調整、コッコ・サンとの連絡調整、お礼状の取りまとめを行うことでスムーズに開催することが出来た。また、鉛筆の持ち方教室に研究員も同行し、町内の小学校1年生の授業を参観させていただいて、鉛筆の持ち方指導について学ぶことが出来た。

【今後の取り組み案】

来年度も、1学期の早い段階での持ち方教室が開催できるようにしたい。



令和3年度 四万十町教育研究所スタッフ

所 長	野村 泰子	
研 究 員	浜口 千茶	
教育相談員	伊賀 修	山崎 一
教育支援センター指導員		
	榊山 雅子	中越 幸香
	小野川 恵利	国広 由香
	中津 吉弘	中平 均
スクールソーシャルワーカー		
	齋藤 マサ	芝 たが
事務職員	長山 智花	

令和4年3月31日